

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症 例 概 要 利用者氏名:97歳 性別:女性 介護度:要介護

病 名:第一腰椎圧迫骨折

利用サービス: 入所

経 過:もともとは独居で生活されていた。

2025年12月、自宅で尻もちをついて転倒した。右臀部から右下肢にかけて疼痛があり、近隣の整形外科を受診したが、レントゲン上では骨折所見を認めず、自宅で療養していた。

しかし、同月歩行困難となったため、ストレッチャーで当院外来を受診した。レントゲンおよびCT検査の結果、第一腰椎圧迫骨折と診断され、回復期リハビリテーションを目的に当院へ入院した。

2026年2月病名が馬尾症候群へ変更となった。

その後、2026年4月に「ライフサポートねりま」へ入所となった。

内 容

入所当初は、あまり活動的ではなく、常に居室で横になって過ごされていた。声かけをしても反応が乏しく、何をするにも意欲がないように見受けられた。

そこで、少しでも身体を動かしていただきたいと考え、体操に参加してみないか都度声かけを行った。継続して声かけをするうちに、少しずつ体操へ参加されるようになり、居室から食堂で過ごすなど、生活リズムにも変化が見られるようになった。

以前からは想像できないほど笑顔が増え、棟内を散歩する姿も見られるようになり、少しずつ活気が戻っていった。

ピアノとの再会

ある時、リハビリ室にピアノがあることを知ったご本人がピアノの前に座るようになった。それを見た職員が、「以前ピアノをされていたのであれば、弾いてみませんか」と声をかけたところ、ご本人は「恥ずかしいわ」と話された。

その後も、時折ピアノの前に座っている姿が見られたため、「それでは、まず手書きのピアノから弾いてみませんか」と声をかけた。すると、気恥ずかしそうにしながらも、「それなら、やってみようかしら」と答えられた。

そこで、簡易的に作成した手書きのピアノから弾き始めた。次第に昔の記憶を思い出されたのか、少し

ずつ自信もついていったようであった。やがて、本物のピアノを音無しで弾き始め自信がついてきたのか人差し指で「ポン、ポン」と弾くようになり、日を追うごとに音が増えていった。

間もなく短い曲を奏でるまでになり、退所を迎える頃には、他のご利用者が集まる中で、見事にピアノを演奏される姿が見られた。

考察

ご本人と生活を振り返る中で、以前はピアノ教室を開いていたことや、外出が好きで、スケッチブックを片手に出かけていたこと、毎週のように外出していたことが記録から分かった。

こうした姿から、少しずつ以前の活発さを取り戻しつつあるのではないかと感じた。

本事例では、身体機能やADLの向上だけでなく、ご本人が大切にしていた「趣味」を再び取り戻すことができた。絵を描くことやピアノを弾くことを通して、ご本人らしい笑顔や意欲が引き出され、最終的には「ピアノを弾く喜び」という、その人らしい生活につなげることができた。

ご本人が大切にしてきた趣味や過去の経験に着目し、その人らしさを支援に取り入れたことが、本事例における大きな変化につながったと考える。